

満州事変期の軍国熱と排外熱

—甲府市を事例として—

小菅信子

はじめに

満州事変と民衆をめぐる諸問題は、主として民衆の軍国主義的・排外主義的動員の進展過程を中心に論じられてきた。

具体的には、今日に至るまでに、満州事変が同時代の人々の意識および行動に画期的な変化をもたらす契機となつたことを前提に、事変下民衆の軍国熱・排外熱が、一九三一（昭和六）年九月の事変勃発から三三（同八）年春の國際連盟脱退に至る期間に、必ずしも持続的に高揚していたのではないことが指摘されている。同時に、連日にわたり新聞を賑わした慰問金・慰問品の拠出、出征軍人慰問会の開催、大々的な戦没者慰靈祭、青年子女による志願などに見えてとれるような、人々の熱狂的反応は、一つには前線で戦う兵士への同情、一つには戦争による景気回復への期待、また一つには國際的孤立による危機感がその主たる要因であったことまでも確認されている。

このような先行研究としては、たとえば、赤沢史朗「満州事変の

反響について」（『歴史評論』三七七号、一九八一年九月）、江口圭一「満州事変と民衆動員」（『日中戦争史研究』吉川弘文館、八年）、または、芳井研一「満州侵略と軍部・政党」（『講座日本歴史 近代4』東大出版会、八五年）などがあげられる。さらに、近年、満州事変期の民衆動員に関して、「ファシズムに基づかない動きをファシズムとどう結び付けるか、軍国主義、排外主義的動員とファシズム的動員を区別すべきではないか」（功刀俊洋「ファシズムと民衆動員」—歴史学研究会現代部会報告、一九八八年一に対する広川禎秀氏の批評）という問い合わせがなされた（『史学雑誌』回顧と展望』第九八編第五号、八九年、参照）。

また、満州事変と民衆の軍国熱・排外熱の問題について、とくに「意識史」的な考察を試みた先行研究としては、栗屋憲太郎「ファシズム化と民衆意識」（『体系・日本現代史』日本評論社、七九年）をはじめ、江口圭一による一連の論文（具体的には、『昭和の歴史4・十五年戦争の開幕』（小学館、八八年改訂）、「十五年戦争史研究の課題」（『歴史学研究』第五二一号、一九八二年）など）、

さらに、黒羽清隆『十五年戦争史序説』（上下巻、三省堂、一九八四年）などがあげられる。本論は、民衆動員に関する研究を前提としつつ、方法論としてこれらに負うところが多い。

また、この時期の民衆状況を考察するためには、全国的な概況を前提とした各地方・地域ごとの具体的かつ精密な個別研究が必須である。すでに、満州事変期の県下の国防献金については、藤井忠俊が『国防婦人会』（岩波書店、八五年）の中で、有用な指摘をおこなっている。しかし、満州事変と民衆意識の問題について、甲府市を事例とした研究は、本年公刊された『甲府市史』において試みられているほか、ほとんどなされていないのが現状であろう。

以上の点をふまえて、本論は、なぜ「誰も望まなかつた戦争」への道の第一歩を、人々が積極的に内発的に踏み出してしまつたのか、という問いを前提に、満州事変期の甲府市を事例として、事変に対する人々の多様な反応あるいは複雑な関わり方について、県内発行の日刊新聞各紙の紙面分析を通して考察する。

その際、資料となる新聞は、『山梨日日新聞』（党派中立・発行部数三二、〇〇〇）、『山梨民報』（民政・九、五〇〇）、『山梨時事新報』（中立・九、〇〇〇）の三紙とする（党派および発行部数は、警保局による昭和二年十二月『新聞雑誌特密調査』より引用）。

一 市民の満州事変觀と排外意識

一九三一（昭和六）年九月十九日、「暴戾なる支那兵が満鉄線を爆破」の号外が発行された。今日において、柳条湖の銃声が関東軍のシナリオによる謀略であったことは周知の事実である。しかし、当時においては、こうした謀略は完璧に隠匿されており、当然のこ

とながら、人々はその情報源である新聞やラジオの報道——これらは官憲による厳しい統制をうけていた——を信じて疑わなかつた。人々にとって、柳条湖事件——満州事変の発端となる満鉄線の爆破——は、「暴戾なる支那兵」によって起こされたものに他ならなかつたのである。たとえば、左に掲げる児童の作文は、満州事変に対する一般的な認識、すなわち、満州事変は、日露戦争において「幾犠牲をはらい」獲得した満州の権益を守るために自衛戦争であるという認識を端的に表現しているといえよう。

「軍歌が元気よく聞える度に、思ひ出すのは、叔父様の事だ。生きていらっしゃれば、今年五十歳になるさうだ。此の叔父も日露戦争の時、あの二〇三高地の土と消えたのだ。……斯うして多数の日本軍人が血を流して得た彼の地の権益を侵されて、何で日本が黙つて居られやう。……略……日本は神国だ、神國の日本人には昔からの大和魂といふ強い見方がついてゐる。何、日本が支那なんかに負けるものか、きつと勝つ。世界中丸かつて來てもきつと勝つ。日本は神国だ、日本は正義のために戦つてゐる。誰が来ようと、正しいことはどこ迄も正しいのだ。正義は永遠の勝利だ。」

（高二男子「軍歌、満州事変を子供から聞く」、『山梨民報』、三十二年三月四日）

また、正義のために戦つてゐるという意識は、交戦国に対する侮蔑感を引き出し、さらに助長する。日清・日露戦争以来、「支那」に対する侮蔑感は人々の心の底に沈殿していたが、いわゆる軍国川柳にはそうした感情を詠んでいるものが多い。たとえば、

「支那兵の屍体へ寒い月が照り」

(春雨選「山日柳壇」『山梨日日新聞』、三十一年十一月三十日)

「事變から麻雀熱が冷めかかり」

(同、十二月一日)

「他愛なく支那を懲らして君元氣」

「満蒙の虫けら拂う日本刀」

(「出征軍人家族慰問」、十二月十四日)

「拳骨の程度で支那をあいしたい」

(同、十二月十八日)

「茄切つた腕チャンコロも此通り」

「心配をするな相手はチャンコロだ」

(同、十二月十九日)

事変勃発直後には、「号外の鉛に心もくもる」中国人留学生に、若干の同情が集まつた(『民報』、三十一年九月二十四日)が、そうした同情も、間もなく警戒心に代わり、さらには、身近な人間の戦死の報に接することによつて、侮蔑感は敵意に転じていく。その結果、これらの人々から感じられる独善的な一種の余裕も、徐々に薄れていくのである。

さて、こうした人々の敵意は、「支那」だけでなく、国際連盟に

対しても向けられた。厳しい報道統制と自己規制の結果、新聞がこゝとあるごとに国際連盟の「非理」を書き立てたためである。しかし、こうした敵意はあくまでも漠然と国際連盟に對して向けていたのであり、必ずしも連盟参加諸国に向けられていたのではなかつた。というのも、人々の意識の中では、欧米諸国とてても一場合によつては国際連盟すらも——「大ちやくでずるい支那兵」の被害者であつたからである。

ジャーナリズムは、一方で国際連盟に対する敵意を煽りながらも、その一方で連盟諸国もまた「支那兵の暴虐」に憤つてゐるというイメージを人々に与えた。たとえば、奉天でホテルを経営するドイツ人およびその宿泊者に暴行をくわえる支那正規兵(三十一年十一月十八日)、上海で米国婦人に乱暴する支那兵(三十二年一月二十五日)、英國義勇軍を襲撃する便衣隊(同一月三十一日)などがそれである。さらに、こうした記事の一方で、上海事変下の上海においては多くの欧米居留民が日本軍の勇敢な行動に心酔して「外人皇軍ファン」となり、慰問品や慰問金の拠出をおこなつてゐるとか、武官連が停戦にあたつて即座に戦闘行為を停止した「日本軍の立派な行動をほめそやし」、「この旨を各國政府ならびに国際連盟に打電した」(同三月八日)とか、孤立化しつつある日本の実像を執拗に隠蔽する記事が掲載された。この結果、人々が、「今に日本の正しい事が世界の人に分かつて来る」(「日支事変に小国民の赤誠」、三月十八日、『民報』)といふ期待を抱くようになるのは当然であった。

このように、滿州事変下民衆の排外意識は、「支那」に対しても頗著であり、連盟諸国に対するそれは、排外意識といふよりはむしろ、日本に対する諸国の「無理解」や「非理」に対する憤懣であつた。ゆえに、滿州事変期における人々の排外熱を考える時、厳密には「外」は「支那」なのであって欧米諸国ではない。誤解をおそれずにいうならば、自らの正義を確信する限り人々にとつて欧米諸国はむしろ「味方」となりうる潜在的可能性すら有していたのである。そして、こした認識こそが、「支那」に対する人々の排外熱をかえつて容易に高揚させる要員となつたのではないだろうか。

二 甲府における軍国美談

次に、この節では、甲府初の戦死者である森下良雄を主人公とする軍国美談を例に、上海事変をピーブとする人々の軍国熱・排外熱について考える。

民衆の軍国熱や排外熱は、一九三二（昭和七）年一月二十八日の上海事変の勃発——これも柳条湖事件と同様に関東軍による謀略であったとともにそのピークを迎える。今日、この時期の軍国美談としては、「肉弾三勇士」が最も有名であろう。彼等の壮烈な戦死は全國的にセンセーションをおこしたが、甲府では、「森下上等兵戦死」の報によつて、すでに一月ほど前からこれと類似の現象がおこつていた。

具体的には、同年一月二十九日、上海事変勃発の翌日、満州十里河西において、独立守備隊第三大隊第二中隊員森下良雄（二三才、市内寿町）および土屋勘一（二一才、東山梨郡松里村）の両名が、「支那兵匪」と「大激戦」の末、「名誉の戦死」をとげた。これ以前に、山梨県出身の戦死者は四名を数えており、いずれの報についても大きく紙面が割かれたが、森下らの戦死の報も、その翌々日には各紙で大々的に報道された。とくに、森下は、甲府市から出征した兵士のうち最初の戦死者であり、その戦死の状況や家庭事情から人々の同情を集めめた。そして、「すべてが軍人の典型」である森下の戦死に関連する記事は、以後連日各紙に掲載されるようになる。

一方、戦死第一報に、地元寿町は即座に全町弔旗を掲げ、在郷軍人会および青年訓練所は花輪を送り生徒を派遣した。こうした人々の反応について書かれた児童の作文を、次に引用しておく。

（「森下上等兵、事変を読んだ児童の文芸」『民報』、三月二十一日）

この作文から、知らせを受けた地元の反応が鮮明に浮かび上がつてこよう。在郷軍人会および青年訓練所は、これらの対応に続いて、二月二日彼の中隊葬と機を同じくして、「慰靈遙拝式」を森下家門前でとりおこなつた。この「遙拝式」には市長、助役らも列席した。さらに、翌日には連隊視察のため入峠中であった第一師団長林千之

中将が、県知事および連隊長とともに森下宅を訪ね、弔意を表した。

森下の市葬は、二月二十七日、市内太田町公園において、空前の規模で挙行された。市がこの葬儀にいかに尽力したかは、葬儀委員の顔ぶれを見れば瞭然である。葬儀委員長に市長助役、委員に市会正副議長、議員、参事会員をはじめ、在郷軍人会、青年団、少年団、商業学校同窓会、戦友会、町総代、市役所各課の各代表が名を連ね、文字通り市を挙げての葬儀であった。各紙によれば、まず当日は、甲府連隊より派遣された七名の喇叭手の合図で出発、その遺骨は五〇余の儀仗兵に守られ太田町公園へと運ばれた。弔旗二〇余、花輪六〇余、その後を市内外各小中学生、青年団員、一般参観者が続き、読経の導師六〇余、葬列は約五丁の長さにおよび、参加者は約一万五千人を数えたという。

こうした前代未聞の葬儀にあわせて、市内衆楽座と甲府劇場では、「森下上等兵劇」が相次いで上演された。とくに、甲府劇場において上演されたのは、「森下上等兵と岡部一等兵」と題される劇で、その内容と劇評は次のようなものであった。

「最初支那民屋の場で岡部一等兵が手紙と写真を受取つて泣く、森下上等兵が慰めながら岡部一等兵の身の上話を聞く辺り見物人に涙を絞らせる。そして、事情をきいて『さうか、それなら泣け、うんと泣け、強い人ばかりが軍人ではない、それより身体を悪くしては駄目だ、火にあたれ』と云ふ件は人情味たっぷりでご両人上出来と云所。それから森下上等兵が斥候を命ぜられた時岡部が泣いて同行を求むると『お前は病身だ』と慰めるあたり、また一寸した台詞だが森下が中隊長にむかひ『中隊長、岡部は可愛い奴であります』と言ふ一句などはホロリと

させられた：略：「森下上等兵が」負傷して失神した時日本軍のラッパの音を聞いて喜ぶしぐさや、最後に軍旗に対してもすがりつくあたり息もつかせぬ巧妙さだ」（『山梨民報』二月二十八日）

こうした劇評からうかがえるように、この軍国劇は「軍人の範」あるいは軍人の理想像を、その勇敢さと同時に人間性に見出すことによって、人々の「ウケ」をねらつたのである。そして、逆の見方をするならば、「名譽の戦死」をモチーフとする軍国美談の氾濫した上海事変下で、人々はこうした美談の中に軍人の人間性—この劇作家の言を借りるなら、「人間としての軍人」—を見出し、軍国主義への順応を肯定し促していくのである。

十五年戦争初期における人々の内発的な軍国主義化は、直接的にはマスメディアによる人間性あるいは人間の「情」の強調と密接に関連していた。そして、この時期にマスメディアが果たした最も重要な役割の一つは、軍国主義的偶像を乱造し、人々に「死」に対する抵抗力をうえつけたことにあつたといえよう。軍国美談の主人公たちは、戦死することによって「英靈」「護国の鬼」として紙上に虚構の生命を得、現実に生きている時以上に雄弁に人々に語りかけた。血書や血判などによる若年層のヒステリックな志願が激増した背景には、今や「スター」である「英靈」たちへの憧れがあつた。この意味で、十五年戦争初期のマスメディアは、華々しい戦死報道によって本来の意味での「死」を隠すことに成功したといえるのではないだろうか。

三 「軍国の母」たち

さて、前節で述べたような「名誉の戦死」という美談は、他の軍国美談や報国美談とは質的に異なるものであった。なぜなら、この時期の美談は、その多くが「反応」としてとらえられるものであるが、「名誉の戦死」あるいは出征にまつわる美談は、民衆意識の軍国主義化に多大な影響を与え、他の美談を生み出す「主体」としてとらえることができるからである。そして、こうした軍国美談の影の主役は、戦死者の母であり出征兵士の母であった。

最初に、森下上等兵の母もん（当時六五才）の場合について考えてみたい。『山日』（一月三十一日）によれば、息子の戦死第一報に接して、良雄を「女手一つで成人」させたもんは、「流石に名誉ある軍人の母らしく一滴の涙も見せず『御國の為、天皇陛下の御為に死んでくれたのですから、私としては軍人の母として心行くばかり嬉しく、一人前の軍人の母として皆様に顔合わせも出来る訳です』」と記者に対して「在りし日の乃木將軍夫人静子氏」を思われる態度で接したという。一方、「乃木少年隊」の隊員であった尋常小学校五年の男子生徒は、後日森下家を慰問し、もんと対面した時の様子を次のように綴っている。

「そこへ森下様のお母さんが、泣きはらした目で出ていらつしゃった。『どうか皆さん：あの憎い支那兵を：支那兵を御國のために時が来たら…時がきたら必ず討つて下さい。森下の、森下の母がかうお願ひします』といはれる」
（「戦死せる勇士の生家を訪なふ、満州事変を子供から聞く」『民報』、三月十日）

満州事変下の「軍国の母」たちは、トップ記事においては大抵「涙」を流すことはなかった。そうした記事において「涙」を流すは、もっぱら美談に「関心」する軍関係者や記者であった。しかし、読み記事や文芸欄で、彼女は「涙」を流し、「親心」をほとばしらせた。出征兵士を息子にもつ母たちにとって、当然のことながら戦死は「名誉」ではあっても「本望」ではなかったのである。インタビューを受けたある出征兵士の母（六四才）は、次のように息子の安否を気遣っている。

「大丈夫だと思ひますが、死なしたくはありません。生きてゐて、国の為に働いて呉れるように念じています。ですから毎日神様に御祈りしてゐるわけでございます。…略…これが母の真情です」

（「軍国の春」『山日』、三十二年一月七日）

今や彼女に慰安を与えてくれるものは、唯一満州から届けられる「戦地の便り」であった。兵士たる息子は、「二日間飯も喰はず、水も飲まず」古城子における接戦の末、「剣銃で支那兵の咽喉を突いて戦死を免れた。その瞬間を、彼は母に宛てた書簡の中で、「とても気持ちがわるかった、人を殺すといふ事はいやなものだ」と述懐した。この手紙を読んだ母は、その晩次のよろ夢を見たと語る。

「善」「息子の名前」が帰つてきたのです。青い着物を着てね、おう、よく帰つて『どうして青いキモノ等を着たのだい？』と聞くと『戦地に行つたから』といふ、戸を開けると姿がない

（同前）

論者の拙い分析を待つまでもなく、このエピソードから、たとえ

「正義」のためであれ「人を殺す」ことに対して、母子ともに強い抵抗感をもっていたことが読みとれよう。

また、別の「軍国の母（六二才）」は、事変が息子の除隊を「ふいにして」しまい、「折角の正月もモ一年一人ぼつち暮し」で過ごさざるを得なかつた。孤独のうちに、彼女は、「今年こそは伴と二人で正月ができると思ついたら、憎いちゃんころの奴が」と、支那兵に対する憎悪をつのらせていたが、「戦地の便り」が届けられる

と、「この賀状と一緒にさへあれば伴と元日を迎へたとちつとも変わりはない」と喜び、神棚に息子の好物である饅頭を「沢山捧げ」

た。さらに彼女は、事変勃発以来、「國の為だから次男坊だから死んでもよい」と自ら言い聞かせつゝも、戦地に激励の手紙と肌護りを送り続けた。しかし、「どうも女はいけない。強いことを言つても却つて悲しくなる様に書くから」という息子の要望で、やむをえず以後一切の戦地行きの手紙を大家に頼むよにした。そして、息子の返事が滞りがちになると、新聞をとり報道写真の中にわが子を探した。そして、そのように語りながら、彼女は「いつの間に膝の上に軍事郵便十数通を並べてゐた。それが涙でぐしょぬれになつていた」という（「軍国の春」、一月九日）。

あえていうならば、こうした「軍国の母」の悲哀は、二重の悲劇としてとらえるべきであろう。一つは、息子の出征、戦死という直接的な悲劇であり、今一つは自らの悲しみを語ることによつて次の悲劇を容易にしてしまうという、いわば間接的な悲劇である。実際、森下の母の訴えに、人々が「憎い支那兵」に対する敵意を高めただろることは想像に難くない。軍国熱・排外熱のひとつの中点は、まぎれもなく戦死者の家族に対する同情にあつた。多くの「軍国の母」

の悲しみから生じた敵意は、「支那兵」に向けられ戦争そのものは向けられなかつた。もちろん、こうした反応の背後にある反戦的言動の徹底的弾圧という事実を見逃すことはできない。しかし、その一方で、家族を失つた者のやむをえない非理性的な言動が、軍国主義化に拍車をかけていたのも事実である。ここに、人々の戦争協力といった問題の、最もデリケートで、最も危うい側面が潜んでゐるのである。

四 愛国心の序列

江口は、満州事変勃発に際して、「生活に恵まれない人の方がむしろより好戦的であり、排外的であつた」（『十五年戦争の開幕』）と指摘している。そして、その理由として、満州事変が、これらの人々の、中国に対する蔑視感、滿蒙への執着心、日常生活のうつぶんのはけぐちとなつたことをあげている。これらの問題について、本論においては、一九三二（昭和七）年三月末に甲府劇場で開催された、出征軍人および家族に対する慰問会「唄と舞踊と映画の夕」を中心に論を進めていくことにする。

最初に確認しておかなければならないことは、この慰問会が「甲府オールカフエーの娘子軍」、すなわちカフエーの女給らによつて開催されたという点である。もっとも、一般的に、当時開催された慰問会の「慰問」という肩書きには時局便乗的な色彩が濃く、実際その内容は、軍国熱や排外熱を高揚させるというよりも、娯楽本位の演芸会であつたり、教養講座的なものが少なくない。実際、より多くの慰問金を得るために、会の演目はむしろ娯楽的でなければならなかつたのであろう。この意味で、昭和初期の「エロ・グロ・

ナンセンス文化」の旗手であるカフェー女給による慰問会は、たしかに「意義ある催し」であった。

具体的に、「唄と舞踊と映画の夕」開催に至る経緯を概観してみたい。まず、主催者である『山梨民報』紙上でこの慰問会の開催が予告されたのは、同年三月十三日のことであった。以後、二十四、

二十五日の会当日まで、『民報』は、「唄と舞踊と映画の夕」の盛

会を期して、紙上で一大キャンペーンを繰り広げた。それらの記事によれば、この慰問会は、当初女給一八〇余名によつて「出征兵士慰問後援会」が組織されたところを端に発する。そして、このうち五〇余名が有志として慰問会の出演者として選ばれ、ただちに下稽古を開始した。

紙上キャンペーンにおいては、連日三人ないし四人の出演者の顔写真が掲載され、「何れも美人揃ひ」であることが披露された。十七日に予告された当日のプログラムは以下のとおりである。

一、ヴァリエテ

- ① 小唄舞踊 窓に凭れて
- ② 寸劇 いんちま同志
- ③ 独唱 朗らかにならうよ
- ④ スケッチ 停車場
- ⑤ ジャズダンス 水兵
- ⑥ 独唱 丘を越へて
- ⑦ スケッチ 自動車
- ⑧ 寸劇 酒は涙か

二、剣舞

三、新舞踊

新作・唐人お吉

四、レビュー

五、戦争童話

六、レビュー

七、映画主題歌劇

八、レビュー

九、映画

放送舞台劇

侍ニッポン

カフェー行進曲

風雲青葉城、他

御花見

愛国少年

二十五日の会当日まで、『民報』は、「唄と舞踊と映画の夕」の盛

会を期して、紙上で一大キャンペーンを繰り広げた。それらの記事によれば、この慰問会は、当初女給一八〇余名によつて「出征兵士慰問後援会」が組織されたところを端に発する。そして、このうち五〇余名が有志として慰問会の出演者として選ばれ、ただちに下稽古を開始した。

紙上キャンペーンにおいては、連日三人ないし四人の出演者の顔写真が掲載され、「何れも美人揃ひ」であることが披露された。十七日に予告された当日のプログラムは以下のとおりである。

一、ヴァリエテ

- ① 小唄舞踊 窓に凭れて
- ② 寸劇 いんちま同志
- ③ 独唱 朗らかにならうよ
- ④ スケッチ 停車場
- ⑤ ジャズダンス 水兵
- ⑥ 独唱 丘を越へて
- ⑦ スケッチ 自動車
- ⑧ 寸劇 酒は涙か

二、剣舞

三、新舞踊

新作・唐人お吉

毎夜遅くまで働き労れた身体をものとせず、常日なればいまだ眠りの床にある午前八時といふに早くも跳ね起きて出席し涙

ぐましいまでの猛練習を続けてゐる」（三月十五日）

「ねむい目をこすりながら早朝から汗だくだくなつて次からつぎへと猛練習がおこなはれてゐるが、ここに集まつた五十余名の女給連はいつしか姉妹の如き友情をもち、「シャンデリアのもとで五色の酒を飲むと…御國の為めに働くよ…心はいつも彼の地の皇軍兵士に走つて」などと、たがひに励まし、慰めて練習に精進する様は、これが女給さん達の心情かと思はれぬやうな、全く他では見られぬ床しさと親しみを見せてゐる」

（同十七日）

いうならば、カフェーの女給が「御國の為」に「銃後の勤め」を果たす—すなわち、慰問会を開く—という意外性が、「唄と舞踊と映画の夕」のアイデンティティーだったのである。これに関連して、出演者らは次のような「抱負」を語つてゐる。

「私は私の心情を舞台から大衆に披露する為めにこの運動に加わつたのです。御國の為めに彼の地に働く皇軍の事を思へば、じつとしては居られないのです。うんと懸命でやりますから皆さんに応援していただきたいのです」

「とかく誤解され易い商売にある私等です、こんな時に弱い商売に働く私たちの眞の気持ちを皆様に知つてもらいたいのです。生きて帰らぬ死を覚悟して祖国のために戦線に立つて戦つてゐる皇軍はどんなに困苦をなめてゐることでせう。こんな事を思へばたとへ家族の者が出征しないにしても、だまつて見て居られませうか！」

街頭で千人縫いをやつたときでも、たくさん縫つて上げたのは私たち同じ商売の人だといはれてゐます。私たちは皆んな真

剣です。」（同十五日）

ここでいう「千人縫い」の挿話は、同年三月八日付『民報』の記事、すなわち、「千人縫い」を集める女子青年団と記者との、次のような談話によると思われる。

記者「どんな夫人が一番余計に縫つて呉れますか？」

岡部「青年団団員」工女が絶対数をしめてをります。彼女は

実際真剣ですか？」

記者「女学生なんかはどうですか？」

岡部「大概、はずかしそうにしてもじもじしながらやつて呉れる始末ですから？」

記者「芸者なんかはどうですかね？」

岡部「十二日間も我々は声を枯らしてやつてゐますが、その間僅か二名しかありません。外にも随分通行しますが冷淡ですよ。」

記者「では女給なんかはどうですか？」

岡部「女給さんは皆縫つて呉れてゐますよ。進んでやる点は女

岡部「其他一般婦人はどうですか？」

岡部「何れも熱心でしたよ。」

（「涙ぐましい街頭の奉仕、千人針を求める人と縫う人々」）

この談話はさらに、間違つて男性が縫おうとした例—周知の通り、この奉仕は男性には出来ない—、献金しようとした例などをあげているが、「洋装なんかしてゐる婦人はてんて見向きもしない有様だつた」という指摘がなされている点は興味深い。こうした現象に、岡部は「若い人たちは良い実物教育」になつたと語り、記者は「此

の簡単なる問答に含まれた現代社会の国民性を深く考究」させられたと批評しているが、このことは千人針に進んで協力する女給や女工が、芸妓、あるいは女学生や上流の洋装婦人より社会的な地位は低くとも、銃後をまもる婦人として高く評価されていることを示すものである。

女給の場合、彼女らは、大衆の娯楽欲求を芸妓と違つて安易に充足してくれる、いわば「エロ・グロ文化」時代の華的存在であった。しかし、県内における彼女ら生活実態は、大都市部とは違つて悲惨であった。女給は、失業女工の再就職先であり、貧農の娘たちが家計を援助するためには最も安易な就職口でもあった。とくに昭和恐慌下では生活苦からの自殺者が続出したが、女給もその例外ではなかった。彼女らの劣悪な生活程度については、滞納処分に赴いた市の税務署員が、その所有物の少なさに差押えされることさえできず、結局督促状だけをおざなりに発送する他なかつたこと（『甲府市史、通史編第三卷近代』、一九九〇年、六六六—七頁）からもうかがうことができよう。

このような状況下で、「非常時」においては、万事「愛国心」次第で社会的評価が逆転する可能性が、彼女たちにアピールされていたのである。いいかえるならば、満州事変の熱狂の渦の中では、愛國心」を披瀝する度合いによって、その職種や階層にかかわらず社会的な序列が決定されるという幻想が、多くの社会的経済的弱者の軍国熱や排外熱を一層高揚させたのであった。

おわりに

以上、満州事変期の甲府市における人々の軍国熱・排外熱について

て、若干の考察および分析を試みた。紙面分析に終始したこと、また、時期的に、満州事変勃発以後、上海事変期に至るまでが中心となつたため、上海事変の停戦協定が調印される三十二年五月以後、三十三年春の国際連盟脱退に至る時期の軍国熱・排外熱の諸相についてふれることができなかつたことなど、反省点は多い。とくに、連盟脱退期の民衆の軍国熱・排外熱は、松岡全権のパーソナリティと密接に関わっている。ゆえに、これについては、松岡が連盟脱退後推進した「政党解消運動」に対する県内の反応と含めてあらためて論じるべきであろうと思われる。

また、本論では必ずしも地方としての甲府といった視点から市民の軍国熱と排外熱を考察しなかつた。論者はすでに、この問題について、事変勃発直後、市会を中心いて、在郷軍人会・連隊関係営業者らによつて展開された「甲府連隊存置運動」を中心に考察をおこなつてゐるので、そちらを参照されたい（『甲府連隊』存置運動については、拙論「満州事変と民衆意識に関するノート—『甲府連隊』存置運動を中心にして」、上智大学大学院史学専攻院生会編『紀尾井史学』第9号）。

満州事変勃発とともにヒステリックなまでに高まつた民衆の軍国熱・排外熱はそれらを支える下部意識においてはきわめて多様であった。そして、多様であったがゆえに、人々の軍国熱・排外熱は積極的かつ内発的なものとなりえたのではないか。いうならば、「十五年戦争の開幕」において、満州事変は、国内の人々にとつて、まだ一定の美的距離を有する勧善懲惡のドラマであった。それゆえに、人々は予め定められた調和―自らの正義にたのみ、毅然たる態度を保つていけば必ず理解と勝利に至れるというヴィジョンーを確信し、

「死」に対する抵抗力をやしなうことができたのである。また、これらが積極的かつ内発的熱狂の核となつたのは、戦死者およびその家族に対する同情であったが、この段階においてとくにアピールされたのは戦死の「名誉」と同時に、その悲哀であり彼等の人間性であった。そして、人々の熱狂はとくに後者をその核とするものであつたといえよう。さらに、事變は社会的経済的弱者に対するものであつたといえよう。さらに、事變は社会的経済的弱者に対するものであつたといえよう。さらに、「生活に恵まれない人々」の熱狂に疑似革命的幻想を与え、とくに「生活に恵まれない人々」の熱狂に拍車をかけた。

このように、人々の軍国熱、排外熱は必ずしも事變支持をその根

底とするものではなかつた。しかし、それゆえにこそ、ここに「誰も望まなかつた戦争」への道の第一歩を、人々が積極的に内発的に踏み出してしまつた理由がひそんでいるのではないだろうか。今後は、こうした多様な事例をより多く抽出しながら、軍国主義化を底辺で支える民衆の多様な欲求が、十五年戦争期において、何に集中していく—あるいは集中させられていく—のか、という問題について考えていく必要があるだろう。

(上智大学大学院後期博士課程 塩山市)